横須賀市立諏訪幼稚園だより

夢・感動・笑顔あふれる幼稚園めざして…

さるしま junior

第 20 号（冬ーその 5）
令和 4 年 2 月 24 日発行
園長　小菅　哲也

スポーツのもつ厳しさや難しさを感じた冬季五輪

2 月 20 日（日）に閉幕した『2022 年北京オリンピック』。選手たちが繰り広げる数々のドラマに胸を熱くする 17 日間でした。

冬のスポーツは、雪や氷、風といった自然条件（環境）に大きく左右されます。それだけにスポーツのもつ厳しさや難しさがより鮮明に浮かび上がる感じです。

『フィギュアスケート男子』では、五輪 3 連覇のかかった羽生結弦選手が、最初のジャンプを行う際、リンクにできてしまった溝につまずき、大きく出遅れてしまいました。

『スピードスケート女子団体追い抜き』では、カナダチームのすさまじい追い上げを受けながらも連覇に向けて好調にレースを進めていた日本チーム。ゴールまであとわずかのところで、高木菜那選手がバランスを崩して転んでしまいました。

ほかにも吹雪や強風に涙をのんだ選手や、思いがけないミスに唇をかみしめる選手の姿が映し出されました。映像からは推し量ることができない、さまざまな困難を心にしまって競技に臨んだ選手もいたはずです。連覇を成し遂げたり、自分のもつ力を出し切ったり、自分の思い描いた通りに演技したりすることがいかに難しいことか…。

つまずいた後の選手たちの美しい輝き

しかし、「つまずいた」選手たちの「その後」の演技や競技、振る舞いが、栄冠を手にした選手たちに負けず劣らず輝きを放っていたシーンも再三登場しました。

羽生選手は、先の演技で 8 位と出遅れ、おまけに右足首も痛めてしまったのにもかかわらず、2 日後の演技で「4 回転半」という前人未到のジャンプに挑みました。“世界初”の成功こそお預けとなりましたが、7 分間の演技は王者の貫禄が漂う堂々たるものでした。

高木菜那選手は、転んだ時フェンスまで飛ばされてしまいました。しかし、すぐに起き上がり懸命にチームメイトの高木美帆選

手と佐藤綾乃選手を追いました。2 連覇こそなりませんでしたが、「一糸乱れぬ隊列の美しさ」と「日本チームの絆の強さ」を印象づけるレースとなりました。

また、『モーグル女子』の川村あんり選手は、今回のオリンピックで「金メダル第 1 号」が期待されたものの 5 位という結果に終わりました。インタビューの最後を「寒い中ありがとございました」で締めくくった受け答えには、メダル以上の輝きが感じられました。

こうしたシーンを見ていると、選手たちの「素の姿」や「真の強さ」が表れるのは、

順境の時より、むしろ逆境の時ではないでしょうか。その姿に勝敗や記録を越えたスポーツの奥深さを感じたり、「自分ももう少しがんばってみようか…」という気持ちにさせられたりしたのは私だけではないと思います。この後の『2022 北京パラリンピック』も楽しみです。

さあこれからだ！

いよいよ卒園式が 18 日後に迫ってきました。小学校入学もまもなくです。子どもたちも家族の皆さんも、期待と不安に胸を膨らませていることでしょう。

幼稚園では、子どもたちが活動しやすいように教職員が日々環境を整えていました。うまくいかなかったり、涙を見せたりした時、仲間や教職員が力を貸してくれました。ところが、これから先は、学習で使うものを自分で準備したり、自分の思い通りに事が運ばなくても我慢したり、だれかの助けを待つのではなく自分で行動を起こしたりすることが少しずつ求められてくるはずです。つまずくこともたくさん出てきます。

「つまずいた石は、踏み台にもなる」という言葉があります。つまずいた石が大きければ大きいほど、高くジャンプできるという意味です。つまずいたり、失敗したりした経験は、それを乗り越えた時、「大きな強み」となって自分に返ってきます。

私事で恐縮ですが、小学校の時、体育が大の苦手でした。低学年の頃は、体育の授業がある日は学校を休みたいと思ったこともありました。しかし、その 15 年後になぜか体育の教員になっている自分がいました。子どもの時、うまくできなかったり、悩んだりした経験は、体育の授業を行う上で大きなヒントになりました。諏訪幼稚園の教職員も、同じような経験をたくさんしています。

難しいことでも苦手なことでも、自分のペースで 1 歩 1 歩挑戦してみましょう。つまずいてもあきらめなければ、必ずチャンスがやってきます。その先には、今まで見たことのないような素晴らしい景色が広がることを信じて…。何よりも諏訪幼稚園の子どもたちには、やさしくて頼もしい「家族」という“世界一の応援団”がついていることも忘れないでくださいね！

※後半の画像は「ソーラン節」の演技と太鼓演奏です。